

2011 年度 畠山ゼミ

卒業研究論文 要旨集



2012 / 2 / 6



早稲田大学 人間科学部

目 次

1. 伊奈 卓真 カラーユニバーサルデザインから見る公共交通機関の現状と課題
2. 岡崎 達郎 人とランニングの研究について
3. 岡崎 遥香 商品パッケージの開封しやすさについての研究
4. 鴻池 真理子 バリアフリーマップの作成に関する研究
5. 齋藤 雄司 家屋内における事故の防止対策への負担に関する調査研究
6. 志磨村 早紀 聴覚障害学生支援における支援者と被支援者の心理的なギャップに関する研究
7. 神野 幸康 重度身体障害者における就労実現までのプロセスに関する考察
8. 武田 優 知的障がい者サッカーに関する現状と分析に関する研究
9. 舘田 美保 路面電車のユニバーサルデザインのあり方
10. 中村 浩樹 駅のユニバーサルデザイン設計に関する研究
11. 長谷部 優 障害のある人から見たスポーツの意味と今後の課題
12. 前川 歩 高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街に関する研究
13. 柳原 健亮 左利きのユニバーサルデザインについて
14. 米山 未央 おしゃれ車いすの効果
15. 杉中 拓央 高等教育機関に在籍する聴覚障害学生の支援に関する研究

カラーユニバーサルデザインから見る公共交通機関の現状と課題

1J08E029-4 伊奈 卓真

(指導教員) 畠山 卓朗

第1章 はじめに

現在日本の場合、男性だと20人に1人、女性だと500人に1人の割合で色覚に障害がある人が存在する。世界では2億人存在すると言われている。そこで、筆者は普段の生活の基盤とも言える公共交通機関のサイン計画に目を向けた。

また、東京大学分子細胞生物学研究所の伊藤啓准教授や、特定非営利活動法人カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)等が制作したカラーユニバーサルデザイン推奨配色セットの効果を標準色と比較して数値化することも本研究の目的である。

第2章 研究の背景と現状

研究の背景としてカラーユニバーサルデザインに関する予備知識についてまとめていく。筆者が特に注目したカラーユニバーサルデザイン推奨配色セットについて、そして実際にそれをどのように使用するかなどもまとめていく。また、カラーユニバーサルデザインから見た公共交通機関の現状にも触れていきたい。

第3章 実験

3.1 目的

本実験はカラーユニバーサルデザイン推奨配色セットの効果を標準色と比較して数値化することを目的としている。筆者が推奨配色セットを知った時の感動をより分かりやすく明確にしたいと考えている。また、一般色覚者に対しても推奨配色セットが見易いかどうかも検討したいと考えている。今回の実験の結果でカラーユニバーサルデザイン推奨配色セットの良さを多くの人に分かってもらいたい。

3.2 実験方法

色弱者5名一般色覚者15名を対象に実験を行った。一般色覚者のうち10名は色弱模擬フィルターであるバリエーションを着用して実験を行った。実験は標準色と推奨配色セットをそれぞれ使用した図を用いて行い、早さや正確さを見る実験である。

第4章 考察

第3章の実験の結果から、推奨配色セットの効果について早さや正確さ、色の感じ方を軸に考察していく。推奨配色セットは一般色覚者に対しても見易いのかにも触れていく。また、残された課題や公共交通機関の課題についても述べていく。

第5章 終わりに

カラーユニバーサルデザインはまだまだ発展途上の段階である。色弱者が入学や就職において、差別されていたことは非常に昔のことのように思える。しかし、色覚に障害がある人が日常生活で困難を感じることがなくなった訳ではない。

色の見え方の違いは個性であり、障害ではないと筆者は考えている。色覚に障害がある人が色に困難を覚えることが無くなることが私の理想である。困難が完全に無くなれば、色覚障害も本当の意味で障害ではなく個性になる。今回の推奨配色セットは色覚に障害がある人に対して見易い色の組み合わせの一例である。今後研究がさらに進み、全ての人に対して優しい色の組み合わせが見つかることを祈っている。そして、その理想の配色が全世界に広がることが筆者の夢である。

人とランニングの研究について

1J08E053-6 岡崎 達郎

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 本研究の目的

人間生活において、健康、コミュニケーション、趣味・生き甲斐などの重要な役割を占めている。重要な事柄に対し、スポーツは「生涯スポーツ」という言葉があることから、これらの重要な役割を占めているものに欠かせないものである。ランニングはその中でも手軽に始めることができるため人口が増加している。本研究で、健康ブームや東京マラソンの影響で本格的に訪れたランニングブームに乗じてランニングの魅力とは、楽しみ方とは何なのかを明らかにすることが目的である。今回は「皇居ラン」という言葉が定着したことからもわかる、ランニングブームの先駆的な場所の皇居で、ランナーたちにアンケート調査を行い、ランニングの魅力、楽しみ方を見出す。

この研究の動機として、私の経験がある。今までの私の人生の中で走るということに最も時間を費やしてきて、多くの人や事象に出会い、様々な経験をして走ることの素晴らしさを知ることができた。研究を通じて人がランニングをより快適に、より楽しく行える手段を探り、明らかにし、多くのひとに走ることを始めてもらい、好きになってもらい、充実した時間を過ごしてもらいたいと思ったからである。

2. アンケート調査

本調査では、休日は1万人ものランナーが集まることからブームの中心的な場所である皇居で、ランナー生活習慣の改善、健康や走ることへの知識、ウェアなどに対する趣向を明らかにすることを目的とする。一般ランナーの代表として、走っている人100人をランダムに選出しアンケートを行う。

3. 調査結果

今回行ったアンケート調査からは、ランニングを始めるきっかけで最も多かったのが「健康」継続的

に行っている人のモチベーションの維持に「健康」を挙げる人も多く、次に「ファッション」、「ダイエット」、「大会への参加」と続いた。アンケートを行ってみて、健康やファッションなど、ランニングをトレーニングとして行う目的よりも健康の維持や趣味としてのスポーツとしての取り組みが多いことが分かった。また、生活習慣に関するアンケートでは多くの人が以前と比べて生活習慣の改善から健やかになったという印象を得ることができた。知識に関しては走ること、健康のことへの知識には自信が無く、走ればいいというような考えを持っている人が多い印象を受けた。

4. まとめ

今回の研究ではモチベーションの維持の上位となっていたものについて3つを取り上げた。皇居ランナーから見るランニングウェア・シューズの傾向として、ブーム以前のアスリート向きであった機能性に特化したものではなく、趣味で行っている一般ユーザーまで幅広いニーズがあり、現在最も求められているのはデザイン性に優れ自分でコーディネートできるようなファッショナブルなものである。

健康やダイエットに関しては、ランニングを継続的に行うことで、生活習慣の改善、病気の予防、リバウンドの来ない肉体へ変化などプラス面が多い。しかし、それは正しい知識をもってこそ効率的にできるので、走ることに同時に知識を養うことへの必要性を感じた。

最後に大会に関しては、ランナーが増えるのと同様に大会・イベントは増えているので、様々なニーズに合わせた大会があるだろう。論文の中ではPARACUPEKIDENという大会を紹介した。

本研究を通して、ランニングの可能性について改めて知ることができたと思う。今後更にランナーが増え、健康で元気な日本になることを願っている。

商品パッケージの開封しやすさについての研究

1J08E054-0 岡崎 遥香

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 研究の目的

近年ユニバーサルデザインやバリアフリーが広く注目され、徐々に浸透しつつある。そして今やユニバーサルデザインの観点は、販売されている商品だけでなく、その商品を包装しているパッケージにまで及んでいる。つまり、パッケージにも使用しやすさや開封しやすさというユニバーサル化が求められている。

しかし、そのような世間の需要に対して現実には、高齢者や障がいがある人が使用しにくいと感じるばかりではなく、障がいを特に持たない若者にとっても使用しにくい、開封しにくいと感じるパッケージが多く存在する。誰もが快適な生活を送るためには商品パッケージのユニバーサル化は必要不可欠であると同時に、今後ますます需要は高まると思い、本研究に取り組むこととした。商品パッケージの開封しやすさとはどのような要素が重要であるのか、いいパッケージを世間にさらに普及するために私たちがどうすべきかを本研究をもって明らかにしていきたい。

2. 研究方法

「若者視点」「高齢者視点」「企業視点」の3つの視点からパッケージの開封しやすさ、ユニバーサル化について調査をする。

「若者視点」では大学生を対象に商品パッケージに関するアンケート調査を実施し、どのような条件がたとえば開封しやすいと感じるのかを明らかにする。「高齢者視点」では高齢者がよく集まる巣鴨にて65歳以上の高齢者を対象に商品パッケージに関するインタビュー調査を実施し、高齢者がパッケージを開封する際にどのように感じているか、どのようなパッケージを求めているのかを明らかにする。「企業視点」ではパッケージのユニバーサル化に積極的に取り組んでいる大日本印刷株式会社殿にインタビューを行い、工夫や今後のパッケージの在り方について企業としての考えを調査する。

3. 調査結果

大学生を対象としたアンケート調査では開封しやすさにおいて重要視しているのは、パッケージの開封口である取っ手がわかりやすく、触感でも区別できるパッケージであることがわかった。また、若者が商品購入の際に、パッケージの開封しやすさやリサイクルしやすさという観点を考慮している人がおらず、日常生活でユニバーサルデザインやエコに関して強く意識している若者は少ないようだ。

高齢者を対象としたインタビューでは高齢者のユニバーサル化への関心の低さが顕著であった。ユニバーサル化は高齢者世代にはあまり関係ないと感じている人が多いようであった。また、パッケージの開封に失敗するのを怖れている、はじめから開封できないと諦めていると回答した高齢者が目立った。高齢者はパッケージが開封しにくい原因は自分自身の力が弱くなってしまったせいだと考え、パッケージが開封しにくくても仕方ないと感じている高齢者が多いことがわかった。

4. まとめ

今回の研究で「消費者と企業において意識のギャップがある」「先入観を捨て、新しいことに気づく努力をし続ける」ことの重要性を学んだ。今あるパッケージが史上最高に開封しやすく、いいパッケージであると現状に満足するのではなく消費者である若者、高齢者などの様々な世代、企業がさらに開封しやすくなる方法はないかと常に意識する必要がある。そして消費者と企業の意識の差を解消するために相互協力をし、一緒にモノづくりをすべきだと考える。全員が意識し、開封しやすくユニバーサル化されたパッケージを追求することで、社会はよりよくなると感じる。この気づくための努力がなければ、パッケージのユニバーサル化の発展はないであろう。

バリアフリーマップの作成に関する研究

ー所沢キャンパスの現状調査ー

1J08E078-3 鴻池 真理子

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 序論

近年、我が国では高齢社会が進むとともにユニバーサルデザインの考え方やバリアフリー化がますます浸透し、情報社会もますます発展している。しかし、障害を抱えるマイノリティーが必要とするような情報が公開されていることは稀である。

本研究では所沢キャンパスを調査し、「初めて訪れる車いす利用者に有益な情報とは」という観点からユニバーサル利用が可能なバリアフリーマップを作成する。そして、作成により所沢キャンパスの問題点を顕著にし、改修への足掛かりとなることを望む。また、表示によるバリアフリー化を浸透させ、障害の有無に関わらず移動等ができる空間づくりを推進したい。

2. 本研究の背景

所沢キャンパスが落成した 1987 年頃は地方公共団体へ向け社会参加促進事業や障害者の住みよい街づくり推進事業等の拡充が図られてはいたものの、当時はまだ全国単位で都市のバリアフリー化を進めるような法律はなかった。そして、我が国で初めてバリアフリーに関する法が作られたのは 1994 年であるが、学校は法の対象に入っていなかった。

学校を含む法は 2006 年にできたが、本研究のテーマである学校は多数の人が利用する特定建築物であり、課せられている義務は基準適合への“努力義務”である。

3. 研究方法と結果

100 号館と 101 号館及びその周辺についてフィールド調査を行い、それによって得た情報とバリアフリー新法とを比較し、得られた結果を図や表を使う

ことで示した。そして、所沢キャンパスの現状、バリアフリーの視点からの問題点を明らかにした。

4. 考察

100 号館が建てられた 1987 年から 101 号館が建てられた 2010 年までの間にバリアフリーが進展し、101 号館は 100 号館に比べバリアフリーが考慮されたつくりになっていること、100 号館もよりバリアフリーを意識したかたちへと徐々に変わりつつあることが明らかになった。

が、それと同時に、もともとあった山の傾斜を活かしたこのキャンパスにとって坂道の勾配という大きな問題が残っているということ、バリアフリー新法にはない項目について障壁が見られることもわかった。

5. 結論

今回の研究を通じてひとりひとりのバリアフリーへの意識が環境を変えていくということを感じ、意識の大切さというものを感じた。

本研究の結果が意識の変化につながり、よりよい環境づくりのための足掛かりとなることを、表示によるバリアフリー化が浸透していくことを願う。

しかし、それでもまだまだ足りない部分が多く見受けられ、より一層のユニバーサルデザインの普及が望まれる結果となった。

家屋内における事故の防止対策への負担に関する調査研究

--- 家庭内事故減少に向けて ---

1J08E086-1 齋藤雄司

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 研究の目的

我が国は、ここ数十年で高齢化の進行が著しくなっており、2051年には「5人に2人が高齢者」という時代が来ることが予測されている。そして、高齢者の人口増加に比例するように、家屋内での転倒や溺水といった事故も増加傾向となってしまうている。

家庭内事故に関する先行研究の中で、家庭内事故をまず人々に「認知」させることが重要性であるということが語られていた。筆者もその考えに共感することができたが、「認知」させるだけで、その後の家庭内事故への「防止対策行動」を全てその人任せにしてしまっただけでは、家庭内事故を減少に向かわせることは難しいのではないかという疑問が浮かんできた。また、高齢者にとって、対策行動への「負担」となるものが存在するのではないだろうかと考えようになった。

そこで本研究では、家庭内事故の防止対策を実行していく際の、人々の負担の有無、またその内容を明らかにし、最終的に家庭内事故減少に向け何をすべきなのかを追究することを目的とする。

2. 調査研究

65歳以上の高齢者27人を対象にアンケート調査を実施。アンケートの内容では、まず、家屋内事故への認知度と、危機感を確認した。その次に、「居間・階段などでの転倒事故」と「お風呂場での事故」の防止対策をそれぞれ複数示し、各項目に対し、「実行できると思う」「実行できないと思う」「実行済み」の3つのうちの1つに回答していただき、「実行できないと思う」と回答した人にはその理由も尋ねた。最後に、バリアフリー住宅への改修を例に、同居家族が家の改修に賛成・理解してくれ

るかどうかを聞き、家族に対する遠慮といった面の負担の有無に関して調査を行った。

3. 調査結果と考察

家庭内事故の認知度は比較的高いが、「自分にも不慮の事故が起きるかもしれない」といった危機感を感じている人は、半分以下であったため、危機感を醸成し、対策行動を引き起こせるような「認知のさせ方」も重要であると感じた。

家庭内事故の対策への負担に関する調査では、各対策項目に対し「実行できると思う」と回答した人が多かったが、金銭的な負担や、居住環境を変えたくないという方もおられたため、対策行動全てがスムーズに実行できるとは考えにくい。また、実行率もそれほど高くはないという結果となった。

家族の、改修といった家庭内事故への防止対策への理解に関する調査では、全ての回答者が、同居家族は「理解・賛成してくれると思う」と回答し、改修における家族への不安はないに等しいという結果となった。しかし、実際に、その同居家族が賛成してくれるかは分からないので、今後30代、40代、50代への調査を行う必要がある。

4. まとめ

調査を通じ、家庭内事故に対する危機感を醸成していくことと、対策を講じていく際の負担を取り除く、また金銭面などの支援をしていくことの必要性を学んだ。そして、家庭内事故を減少に向かわせるには、各人の行動任せにするのではなく、市町村(地域)、国、企業、家族といった様々な方面からアプローチをしていくことが重要であると感じた。筆者自身も、家庭内事故減少に向け、更なる研究や取り組みができたらと考えている。

聴覚障害学生支援における支援者と被支援者の 心理的なギャップに関する研究

1J08E103-9 志磨村 早紀

(指導教員) 畠山 卓朗

1. はじめに

現在、聴覚障害学生の支援は広く普及されてきている段階にある。聴覚障害学生支援における情報保障は「参加の保障」とも言われ、聴覚障害学生（以下、被支援者）の講義参加に欠かせないものである反面、被支援者と支援学生（以下、支援者）の間に起こる心理的なギャップから来る問題も、数多く指摘されている。

そこで本研究では、聴覚障害学生の支援において、被支援者と支援者の表面化されない心情や葛藤に着目し、双方にインタビュー調査を行い、質的に分析することで、お互いのギャップとなる要因を抽出の上、考察する。

2. 方法

2. 1 調査対象者

支援者に関しては、地域の高等教育機関において聴覚障害学生支援に携わった経験のある者5名（平均年齢21.6歳）を調査協力者とした。被支援者に関しては、地域の高等教育機関に在籍経験のある者5名（平均年齢23.4歳）を調査協力者とした。

2. 2 調査の方法

インタビュー調査はすべてインターネットを介し、eメールの送受信をすることで行った。インタビューの形式は半構造化面接を採用した。質問については、支援者に対し、支援に対する不安やもどかしさ、また被支援者には、自身の障害に関する自己開示について尋ねた。さらに双方を対象に、支援時の心情や、双方の関係性のあり方について、重点的に質問した。

2. 3 分析の方法

インタビューによって得た発話データは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の方法論に準じてカテゴリ分けを行い、双方のギャップとなる要因と、そこに至るプロセスを見出した。

3. 結果

3. 1 支援者の視点での心理的ギャップ

支援者は、まず【支援環境】によって支援中の心情

が左右し、支援のやりにくさが少なからず存在すると【心理的負担】を抱えながら支援に臨み、【推測による支援】を行っていた。その結果、【支援の失敗】に終わり、また、被支援者との間に心理的なズレが見られることが分かった。

3. 2 被支援者の視点での心理的ギャップ

被支援者にとって【不利な状況】での支援となると、被支援者は【消極的な自己開示】に至り、支援者との【思惑の不一致】が起こる。支援者との【思惑の不一致】が起こることで、両者の間に心理的なズレも見られた。

4. 総合考察

支援者・被支援者に共通して見られた問題は、相手に対する親しさと信頼関係である。適度な距離感を持って接し、継続的な支援関係とお互いへの配慮が両者の信頼関係を築くにあたって不可欠である。被支援者は負担を抱えやすい支援者への心遣いを持ち、支援者は、被支援者へ要望を聞き出すなど、被支援者が自己開示しやすい状況を作ることでもある。また、良好な支援関係を築いていくためには、支援後のフィードバックや、被支援者からの要望を伝えられる場を設けることが望ましい。今後はインタビューの対象を拡大し、より一般的なモデルを作ることによって更なる研究完成段階を目指す。

5. おわりに

本研究では、聴覚障害学生と支援者の表面化されない心情や葛藤に着目し、双方にインタビュー調査を行い、質的に分析することで、双方のギャップとなる要因を抽出した。その結果、双方のギャップは支援者の心理的負担から生じる推測による支援が引き起こし、また、不利な状況下での被支援者の消極的な自己開示も関わることが分かった。これを改善するためには、継続的な支援を通して信頼関係を築くことが求められる。そのためには、お互いへの配慮が必要である。これを実現させる一つの解決策として、両者の意見や要望を伝えあう場を積極的に作る必要がある。

重度身体障害者における就労実現までのプロセスに関する考察

2J08E523 神野 幸康

【指導教員】畠山 卓朗

【教育コーチ】土井 幸輝

1. 背景と目的

現在、障害者雇用の促進の為、法定雇用率を設けられ、それを達成するための制度が整備されつつある。しかし、重度障害者や障害種別によっては就労に結びつかないケースが少なくない。また、重度身体障害者自身もどのような仕事に就けるか把握していない傾向がある。そこで本研究では、重度身体障害者の就労問題を事例的調査から就職へのプロセスを研究することで一つの就労プロセスを整理する。そして、本研究で就労プロセスから現在までを調べ、その過程で重要視すべきことを考察する。

2. 方法

今回の調査にテスト参加者として 40 代男性の中途障害者に協力してもらった。テスト参加者は、19 年前に事故に遭い頸椎を損傷し四肢麻痺となり、現在は神奈川県で家族 5 人と生活している。就労は、大手製薬会社の特例子会社で契約社員として在宅勤務で 3 年目であった。本調査では、就労準備期、活動期、維持期のそれぞれをインタビューさせて頂き、半構造化面接調査法により就労までのプロセスと現在までを整理することにした。

3. 結果と考察

ここでは、就労準備期の構造図（一部）を一例として図 1 に示す。就労準備期において最も重要なのは情報と助言、そしてその環境であることがわかった。助言も環境を間違えると嫌悪感になってしまうこともわかった。その環境創りとして軽作業と

報酬が有効であるといえる。環境の設定は就労が必要な状態を作ることが重要であると考えられる。

就職活動期においては、実力の評価と面接での不安解消が最も重要であった。また、面接時ニーズに合わせた成果物の提示、自分の不安要素についての質問が有効であった。一人で悩まず共に乗り越えてくれるパートナーが重要であると考えられる。

就労維持期において最も重要なのは自己評価の向上であった。自己評価では収入やそれに伴う行動、就労による責任感とそれに伴う行動が重要であると考えられる。

以上より、ひとつの事例ではあるが、重度身体障害者の就職へのプロセスから現在に至るまでを整理することができた。今後は、就労準備期における環境の整備方法と教育機関や就労支援機関から離れた重度身体障害者がどう就労支援を受けるかのプロセスを調べる予定である。

4. 結論

本研究では、重度身体障害者の就労問題の事例調査を行った。その結果、就職へのプロセスから現在までの過程で重要視すべきことを考察することができた。

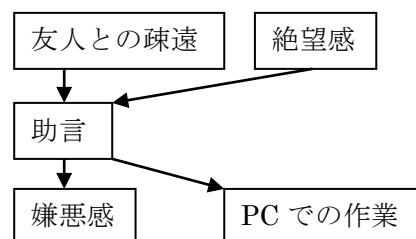


図 1 就労準備期の構造（一部）

知的障がい者サッカーに関する現状と分析に関する研究

1J08D139-8 武田優

(指導教員) 畠山卓朗

1. 研究の目的

性別や年齢・国籍・障がいの有無などに問わず、広く多くの人から愛されているのがスポーツである。その中でも、サッカーは世界中で最も人気のあるスポーツの一つである。また、サッカーは障がいのある人にとっても身近なスポーツである。しかし、障がいのある人たちは、障がいの種類や程度によって、サッカーのルールも変化する。さらに、障がい者サッカーは健常者が行うサッカーに比べると、競技人口ははるかに少なく、また世間での認知度も極めて低い。同じサッカーというスポーツであるのに、これだけの違いがあるのは非常に残念なことである。そこで、少しでも多くの人に障がい者サッカーを認知してもらいたいと強く思ったことから本研究を取り上げることにした。そして、その障がい者サッカーの中でも、知的障がい者サッカーはよりFIFAの定めるサッカーに近く、また日本国内の大会や各地域の選抜チームの交流も充実している。さらに、INAS-FID サッカー世界選手権大会など国際試合も定期的に行われている。以上の理由から、知的障がい者サッカーについて興味・関心を抱いたので、本研究に取り上げることにした。

2. 研究の背景

障がい者サッカーは、ろう者サッカー・ブラインドサッカー・脳性麻痺7人制サッカー・電動車椅子サッカー、そして知的障がい者サッカーの合計5種類ある。それぞれのサッカーにおいて対象者・ルールはもちろん、歴史的な背景も違う。

3. 研究方法

知的障がい者サッカーを調査・分析するにあたって、以下に述べる二通りの方法で行う。

①動画による調査・分析

②インタビューによる調査・分析

動画による調査・分析では、日本知的障がい者サッカー連盟のホームページから第5回 INAS-FID サッカー世界選手権大会南アフリカ大会に参加した日本代表の試合の動画を、フォーメーション、システム、戦術などサッカーの要素から日本代表の問題点

とその改善点を分析する。

インタビューによる調査・分析では、知的障がい者サッカーのクラブチーム(SC所沢)にインタビューを実施して、クラブチーム単位での現状を調査する。

4. 研究結果

4.1 動画による調査・分析

ボールを止める、運ぶ、蹴るという動作は基本的にできていたが、状況判断の悪さなど個人的スキルの低さが目立った。また、チーム全体の組織的なプレーもほとんど見られないため、戦術が浸透されていないことが明白であった。

4.2 インタビューによる調査・分析

知的障がいを持つと、ルールや指示を理解しにくい。また、健常者のサッカーよりも個人差が大きい。そのため、コーチだけでなく保護者も協力することによってサッカーができる環境を作っている。

5. 結論

知的障がい者サッカーを世間に認知してもらうためには日本代表チームの強化をして、国際大会で結果を残すことが必要であると思う。そのサイクルが続くことで、認知から普及までつながると思う。

日本代表を強化するために以下のことが求められる。サッカー環境の整備として、継続してトレーニングできる環境の整備、指導者の質を高めること、育成システムの構築、選手の経験の向上である。また、安定した資金の調達や日本知的障がい者サッカー連盟と地域クラブチームとの考え方の一致を図ることなども重要である。

上記で述べた様々な角度からアプローチをして日本代表の強化をして、国際大会で結果を残すことで、世間に認知され、様々な支援を受けられるようになると思う。その支援によって更なる強化を図ることができ、次の大会でも結果を残すことが可能となり、さらに多くの人から認知をされるであろう。そのサイクルが続くことで、知的障がい者サッカーが広く一般に普及し受け入れられると思う。

路面電車のユニバーサルデザインのあり方

2J08E022-3 舘田 美保

【指導教員】畠山 卓朗

【教育コーチ】土井 幸輝

1. 背景

路面電車は、高齢社会への対応と、エコな街づくりの交通手段として注目されている。2000年頃から各地方都市で乗降車時の段差が少ない超低床式路面電車（低床路面電車）が導入された。しかし、その走行数は限られており段差を越えなくてはならない旧来の路面電車（非低床路面電車）が多く走行しているのが現状である。

路面電車におけるユニバーサルデザインの研究は、低床路面電車を導入することが、デザイン目標として論じられ、路面電車の利用に必要なデザインの一つ一つについて、とり上げられなかった。そこで本研究では、路面電車のユニバーサルデザインのあり方を探ることにした。

2. 方法

本研究では、ユニバーサルデザインの視点である、利用する人の行動に着目し、全国の都市の路面電車を対象に、利用行動に必要なデザインを観察した（研究1）。さらに、デザインプロセスを明らかにするために、研究1のデザイン比較から得られたデザインの傾向と課題について、事業者、デザイナー、利用者に情報提供し、路面電車のユニバーサルデザインのあり方を探った。（研究2）。

3. 結果と考察

研究1では、観察調査と事業者への訪問調査を行った。電車利用に必要な1つ1つのデザインとして、停留場における行き先、停車駅案内、乗車口にステップ（踏み台）、降車ボタン等、デザインの傾向と課題を確認した。利用行動の観察から、非低床路面電車の乗車時の身体的負荷や転倒など危険が予測された。事業者訪問調査では、デザインを改善し工夫を試みる状況が確認できた。しかし、低床路面電車の導入時、利用者評価を行っている事業者はなかった。

研究2では、ヒアリング調査と質問紙調査を行った。予備調査として車両製造会社から車両開発における個々の事業者の環境に合わせた低床化と、予算面の厳

しい現状を確認した。研究1で得られたデザインの課題である、「わかりにくい」、「使うことができない」、「エラー行動を起こす」状況の一因として、利用者の視点からデザインされていない現状が明らかになった。デザイナーへのインタビューから、サインデザインによりエラー行動を確実に回避することができないことから、サインデザインを敢えてしないデザインが提案された。利用者インタビューから、様々な型式の旧来の路面電車が、音や音声で判断している視覚障害を持つ人にとって、デザインの把握と利用を困難にしている状況が明らかになった。

高齢の利用者からは、一人で出かけるための自立を促す交通手段であることが確認できた。視覚障害を持つ人、杖利用の高齢の人の意見から、電車利用を促すためのマナーやコミュニケーションの重要性が明確になった。デザイナーから、マナーとコミュニケーションを創出するデザインの可能性について示されており、両者のデザイン目標が一致した。事業者への質問紙調査からは、これまで実施されていなかった車両デザインの利用者評価の必要性が示された。

ユニバーサルデザインのあり方として、利用者の視点からデザイン目標を設定し、デザインプロセスとして、車両製造会社、事業者、デザイナー、利用者の協力が必要となることが明らかになった。

今後も路面電車は新規に開発が行われていく。

本研究の今後の課題として、利用行動に必要なデザイン1つ1つについて、利用者の声を提示し、「誰のためのデザインであるか」という視点から関係者と相互にデザイン目標を検討したい。

4. 結論

路面電車のユニバーサルデザインのあり方として、利用者の視点によるデザイン目標の設定と、デザインプロセスに利用者の関わりの必要性が示された。

駅のユニバーサルデザイン設計に関する研究

1J08E156-2 中村 浩樹

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 研究の背景

平成 18 年 12 月 20 日に「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」が施行された。これに伴い、全国各地で建築物のユニバーサルデザイン化が推進され、現在もこの活動は続けられている。この法律によって、公共交通機関である駅は、誰もが使いやすい設計をすることが求められている。しかし、現時点ではまだまだ問題点は多く、これから高齢化社会を迎え、人々の生活スタイルの多様化が進み、以前よりもユニバーサルデザインを求める声が高まっている中で、どのように施策を進めていくかが課題となっている。

2. フィールド調査

2.1 調査方法

秩父鉄道の武川駅、JR 熊谷駅、埼玉県ユニバーサルデザインモデル事業が平成 14 年度から平成 19 年度にかけて実施された東武鉄道の朝霞駅を対象にして、実際に各駅に赴き、気になる箇所を、写真を撮って比較調査していく。そして、駅のユニバーサルデザイン設計の進捗状況及び、良い点、悪い点、疑問点を、以下の 5 つの項目に沿って調査する。さらに、朝霞駅については、これらに加えて案内図、駅内トイレ、路線図、公衆電話についても調査する。

2.2 調査結果

武川駅、熊谷駅、朝霞駅の各駅とも、良い点、悪い点、疑問点があり、各駅のユニバーサルデザイン設計の進捗状況を比較調査することができた。その結果、まだ駅のユニバーサルデザイン化を進めていくには、多くの課題が残っていると感じた。

3. 考察

武川駅の今後の課題として、利用者の目線に立った施設づくりに取り組んでほしいということと、駅

施設管理の徹底の 2 点が挙げられる。1 点目として、今まで見てきた通り、とりあえずユニバーサルデザインの概念に沿って設計されてはいるが、いざ利用する際に違和感を覚えてしまう施設が多かった。なので、今後は利用者と話し合う機会をつくるなどして、設計者と利用者のズレがないような施設づくりに励んでほしいと思う。2 点目として、駅施設管理の徹底であるが、せっかく設置したのにもかかわらず、放置した結果、使い物にならないのなら意味がない。利用者のことを考えた行動を行ってほしいと感じた。ただし、武川駅に関しては、1 日の乗降人数が 5,000 人未満であり、法律の適用外の駅ということで、なかなかユニバーサルデザイン化を進めることは難しいであろう。こういった点から、法律だけにとらわれるのではなく、より多くの人が利用しやすいと感じる駅づくりを目指してもらいたい。

熊谷駅の今後の課題として、ユニバーサルデザイン化されていない箇所を今よりさらに減らしていくことが挙げられる。ユニバーサルデザイン化されている箇所とそうでない箇所が混在しているため、駅全体の取り組みとしてユニバーサルデザイン化をさらに推進してほしいと感じた。

朝霞駅の今後の課題は、駅前ロータリーと駅構内の施設の格差をなくしていくことであると考える。

これらすべての問題に関して、ワークショップを行うことは非常に有効な手段であると考える。

4. 結論

各駅ともユニバーサルデザイン化された施設をつくり、利用しやすい駅を目指し対策を行っていた。しかし、それでもまだまだ足りない部分が多く見受けられ、より一層のユニバーサルデザインの普及が望まれる結果となった。

障害のある人から見たスポーツの意味と今後の課題

1J08E173-1 長谷部 優

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 本研究の目的

スポーツと聞くと、メディアで多く取り上げられているものに注目が行きやすい。しかし、少し視野を広げてスポーツの世界を取り上げてみると、「障害者スポーツ」も少しずつではあるが、世界的に発展してきている。それにも関わらず、国内のメディアや地域の活動において、「障害者スポーツ」が取り上げられる場面は非常に少ない。オリンピックと同時に開催されるパラリンピックも、多くの選手が活躍している中、取り上げられるのはほんの一部である。筆者はこのように疑問を持ち、また障害のある人にとって、障害者スポーツについてどのように考えているのかも疑問に思うようになった。このような疑問が抱く中で、障害のある人にとって障害者スポーツに意味と課題とは何なのかについてインタビュー調査を行いながら考えて行く事が本研究の目的である。

2. 障害者スポーツの歴史と現状

障害のある人たちがスポーツのような身体的活動を行っていたのは紀元前からとされている。しかし障害のある人たちが自ら組織を作り自発的にスポーツ活動を行う様になったのは19世紀以降のことである。

「パラリンピック」が正式名称となったのは1985年であり、選手たちの、高いレベルで競い合いたいという動きから、競技スポーツとして成り立つ現在のパラリンピックが誕生した。

3. 調査方法

障害者スポーツに携わっているさまざまな角度の方々からインタビューを行う中で障害者スポーツの意味と課題について迫及する。

4. 調査結果及び考察

1) 障害のある人がスポーツを行う意味

大きく分けて「健康維持」「気分転換」「生きがい」「共生」に分けられた。特に「共生」について、障害の有無に関わらず皆で協力し合いながら生きてゆく世界を作るためにも、スポーツというのは一番身近で簡単な一歩を踏み出す良い機会になるのであろう。

2) 障害者スポーツの課題

大きく「認知度における課題」と「コスト面における課題」に分けることができた。特に「認知度」という点においては、メディアによる知る機会を増やすと同時に、障害者スポーツも「スポーツ」の1つとして取り上げることが、障害者スポーツをスポーツとして認知される一番の手段となるのであろう。

5. まとめ

本調査では、障害者スポーツに携わっているごく僅かな方々の情報ということもあるが、本調査で感じ、目に見えてきた問題点や課題を少しずつでも改善してゆくことが、大切であると感じる。障害の有無に関わらず、多くの人がスポーツを楽しめる「共生」の社会を作ろうとする意識がよりよい発展へと繋がるだろう。

高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街に関する研究

1J08E196-1 前川 歩

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 本研究の目的

本格的な高齢社会に突入した我が国では、高齢者や障がいがある方への偏見の目や知識不足から、彼らが街に出て生き生きとした生活を送ることが困難となっている。これは小さい頃から高齢者や障がいがある方との交流を行ってこなかったことが原因として挙げられる。また、地方都市では「中心市街地の空洞化」が深刻化している。広大な土地を求めて郊外に大型商業施設を開業し、中心市街地が廃れてしまっている地域もある。高齢者や障がいがある方は移動手段が限られているため、そこまで行くことが困難であり、生活に大きな支障をきたしている。

よって、本研究では、若者が高齢者や障がいがある方に対して抱いているイメージと中心市街地の空洞化という2つの側面から高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街にするために求められることは何かを研究する。

2. 研究方法

a) 文献・現地調査

中心市街地の空洞化に関する文献調査を行う。また、事例として筆者の故郷である福井市の中心市街地の現状や活性化のための取り組みについても文献調査や現地調査を行うことで、より深く探求する。

b) アンケート調査

大学生2人に対して予備アンケートを行い、その結果を基に質問内容に修正を加え、その後大学生を対象としてアンケート調査を実施する。質問内容は全部で14問であり、自由回答欄も含める。

3. 研究結果

若者の意識調査として行ったアンケート調査では、今まで障がいがある方に関する知識を得るための授業を受けたことがある学生が8割と多いにもかかわらず、聴覚に障がいがある方、視覚に障がいがある方、車椅子利用者など、実際の場面でのサポート方法に自信がなく、実際に手を貸してサポートした経

験がある学生もごくわずかであるという結果が出た。障がいがある方をサポートする際に、コミュニケーション方法やサポート経験のなさに不安を抱いているといった結果も目立っていた。

このことから、ただ授業で知識をつけただけで、経験に繋がっていないということが明確になった。

4. 考察

高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街にするためには、

- ① 空洞化を今以上に進めない
- ② 若者の意識を変える
- ③ 魅力あるまちづくりを行う

以上3点が必要であり、この3要素は深く関連しあっており、ひとつとして欠けてはいけない。さらに、この3要素が「中心市街地」で展開されることが重要なのである。

5. 結論

高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街の重要なポイントは、「中心市街地」である。よって、中心市街地が空洞化の問題を抱えていては高齢者や障がいがある方にとっては暮らしにくい街となる。中心市街地の活性化と並行して、高齢者や障がいがある方に対して若者が抱いているマイナスイメージを改善していけば、今後の街は若者にとっても高齢者や障がいがある方にとってもプラスになるといえる。このために必要なことは、やはり「経験」である。知識だけを持っていても不十分であり、実践の場で役立つのは経験である。それを身につける場を提供することが今後のまちづくり事業の鍵である。

本研究は、提案の第一歩にすぎない。今後本研究をさらに深めていきたいと考えている。そして、高齢者や障がいがある方が生き生きと暮らせる街になる時代がいつかやってくることを願っている。

左利きのユニバーサルデザインについて

1J08E227-8 柳原健亮

(指導教員) 畠山 卓朗

1. はじめに

現在, 左利きの人は日本の人口の 10~12% を占めると言われている。また, 社会にはビデオカメラ, 缶切り, ハサミなどの左利きの人にとって使いづらいものが溢れている。

本研究では右利きの人の左利きに対する不便さのイメージと, 左利きの人が実際にどのような場面で不便さを感じているのかを調査することで, 利き手の違いによる意識の共通点と相違点を明らかにしていきたい。共通点と相違点を明らかにすることで, お互いの意識の違いを共有するきっかけにしたい。

2. 調査方法

右利きの人に実際に左手での体験をしてもらった上で, 左利きの人が普段どのような場面で不自由さを感じるかのアンケートを行い, 右利きの人が左利きに対する不便さのイメージの調査を行う。

一方で, 左利きの人にインタビューとアンケートを行い, 日常生活のどのような場面で不便さを感じるかを調査し, 左利きの人が実際に抱えている不自由さを調査する。

3. 調査結果

アンケートによるイメージ調査では 48 項目の日用品でそれぞれ調査を行った。

右利きの人が抱く左利きの不便さのイメージで多かったのは自動改札機, 習字, 缶切りなどだった。一方, 左利きの人が実際に感じている不便で多かったのは, 習字, はさみ,

はしなどであった。

4. 考察

自動改札機について考察すると, 右利きの人がイメージするには左利きの人にとって自動改札機は不便と多くの人が考えている。一方, 左利きの人にとっては実際, 10 人に 1 人にも満たない数しか不便と思っていない。

確かに自動改札機は右側にタッチするところがあるため左手ではタッチしづらい。しかし, 左利きの人は不便に感じていない。

ここで筆者が考えるのは左利きの人たちは右利き社会に慣らされているということである。本来であれば使いづらいものではあるが, 慣れ故に気にしなくなったのである。もちろん慣れること自体は悪いことではないが, できればどちらかが合わせるのではなくどちらにとっても使いやすい, ストレスを感じないものが好ましいはずである。その点で自動改札機はまだまだ改善の余地があると考える。

5. 終わりに

本研究を通して今後の機器開発には当事者参加が重要であると感じた。これからは今後の超高齢社会をにらんで, マイノリティの人々, また, 高齢者や障がい者の利用を考えた機器開発が重要になると筆者は考える。製品の概念設計の段階から当事者(高齢者, 障がい者など)を取り込んだ製品開発が行われることで現在より格段に使いやすい製品が生まれるものと確信する。

おしゃれ車いすの効果

1J08E243-2 米山 未央

(指導教員) 畠山 卓朗

1. 序論

障がいのある方と障がいを特に持たない方の双方が、積極的に交流をするための手段の一つとして、筆者は「おしゃれな福祉機器」に期待を寄せている。なぜなら、おしゃれな福祉機器が自信を与え外出意欲へとつながるからだ。また、おしゃれな姿が会話のきっかけづくりや、相手の印象をプラスにし、受け入れやすくなると考える。今回は、福祉機器の中でも「車いす」に焦点を絞って研究を進めていく。

2. 研究背景

研究背景を整理すると、三つのことが言える。

一つ目は、外国の車いすメーカーに比べ国産は機能性でもデザイン性でも遅れをとっている。それにより、わが国の車いす利用者が、国産のものに満足せずに外国産を求めている。

二つ目は、福祉機器に対して一般的にマイナスなイメージを持たれていることが多い。その要因としては、国民性や福祉機器と触れ合うことが少ない生活環境が関係していると考えられる。

三つ目は、福祉機器を利用する者にとって、福祉機器とは毎日使うものであるからこそ、機能とともに外見も納得のいくものを使いたいと考えている。また、その外見美から意欲や自信が生まれてくる。

3. 調査

車いす利用者、車いすの作り手、車いすを利用しない者の3つの立場に分けて調査をしていく。その中で、研究背景で述べた三つのことが現在はどうのような状況であるのか、また「おしゃれ」という要素が障がいのある方と、障がいを特に持たない方をつなげる手段として有効かどうかという点について調べていく。調査後に得られた結果をグラフや表などにまとめて、それぞれの結果を比較して考察を行い、調査のまとめとする。

4. 考察

(1) わが国と外国の比較

車いすメーカーへの評価がわが国は低く、外国は高くなってしまう理由は、二つ考えられる。一つ目は、わが国では、ターゲットを65歳以上の高齢者に置き、外国では子供から若い年齢層に置いている違いがある。二つ目は、日本人があまり福祉機器に投資する考えが薄く、十分にデザインにお金をかけるだけの経済力がないからである。

(2) おしゃれ車いすの効果

車いすに乗らない人は外見美で第一印象を判断し、利用者自身も外見美に大きなパワーをもらっていることが分かった。やはり交流のきっかけとして、外見美を磨くことは互いの距離を縮める手助けをしてくれるといえるだろう。

(3) 車いすの認知度と情報

車いすを利用しない者も車いす利用者自身も、車いすの実態を知らずにマイナスイメージを抱いている。原因の一つとして、車いすの情報が、他の情報に比べて公に出回ることが少ないことがいえる。普段から特定のものを求めなくても入ってくる情報媒体に、車いすを取り入れることができれば、車いすの理解とマイナスイメージへの払拭にもつながる。

(4) わが国の現状とこれから

ユーザーが機能の充実を訴えるということは、車いす業界はまだ発展途上の分野であるからだと考える。車いすも必要な機能性が当たり前になるようにすれば、次に期待されるのは「デザイン」だと考える。さまざまな分野の優れた技術、斬新なアイデアやデザインを車いすに取り入れていけば、ユーザーは増えていくに違いない。そうなれば福祉機器という枠を超えて、車いすを必要とする人が躊躇なく使えるものになり、やがて「障がいというくくりの作らない社会」につながることを信じている。

高等教育機関に在籍する 聴覚障害学生の支援に関する研究

健康福祉科学研究領域

3810C060-5 杉中 拓央

1. はじめに

平成 22 年度「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」によれば、調査対象となった高等教育機関 1,220 校の中で、聴覚障害学生（聾・難聴）の在籍する学校は 377 校、学生数は 1,527 名であり、漸増傾向にある。しかし、聴覚障害学生の支援に対するニーズや、学生生活における困難については、ほとんどわかっていないとの指摘がある。また、聴こえづらさを共感し難いことから、聴覚障害者の特性を十分に理解しない学生や教員も少なくないとも言われている。聴覚障害は、障害が外から見えないこと、聴覚障害による影響と困難を体感的に理解することが難しい。支援を正しく適用していくためには、現場の状況を検証する必要がある。従って、高等教育機関において、聴覚障害学生と、その支援を務める学生に対し調査と分析を行い、支援の在り方を検討する。

2. 調査

2009 年 9 月より 2009 年 11 月の期間に高等教育機関に在籍経験のある聴覚障害者 11 名に対し、学生生活における具体的困難のインタビュー調査と質的研究法による分析を行った。また、2011 年 1 月より 2011 年 5 月までの期間に、高等教育機関においてノートテイクを務める支援学生 14 名に対し、支援時の目的意識についてインタビュー調査及び質的研究法による分析を行った。インタビューにはいずれもメールを用い、発話データの分析には質的研究法グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

研究指導教員：畠山 卓朗

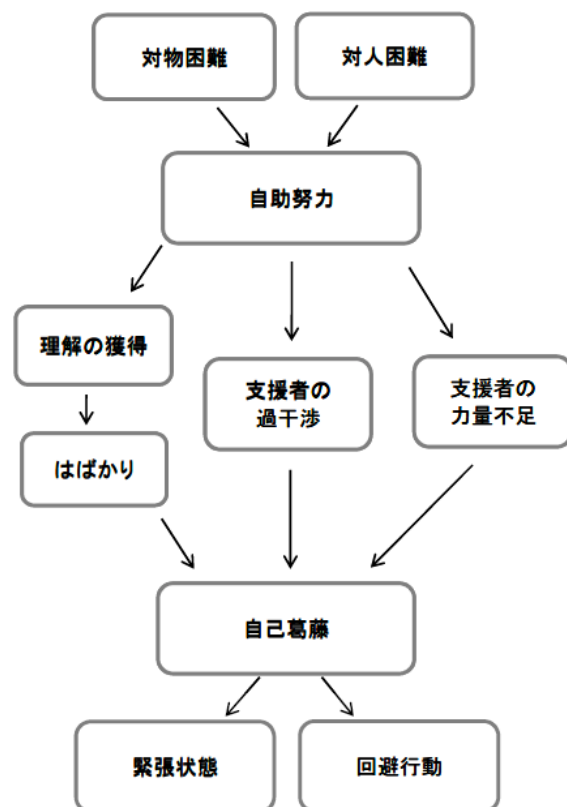


図1 聴覚障害学生の困難の構造

2.1 聴覚障害学生の高等教育における困難

分析から作成した聴覚障害学生の困難の構造を図1に示す。聴覚障害学生はまず、自身の聴力やの影響で、物理的な困難に直面するか、あるいは教員や学生といった周囲の人々の不理解等から関係性を困難とすることが多くあった。上述の当事者は、困難に対し、自習によって情報を補完することや、聞き返すこと、自身の障害を説明すること等、一定の自助努力をしていることがわかった。しかし、ノートテイクによる支援を受けている時は、支援者の過干渉に遭遇する機会があり、支援者の姿勢が熱心

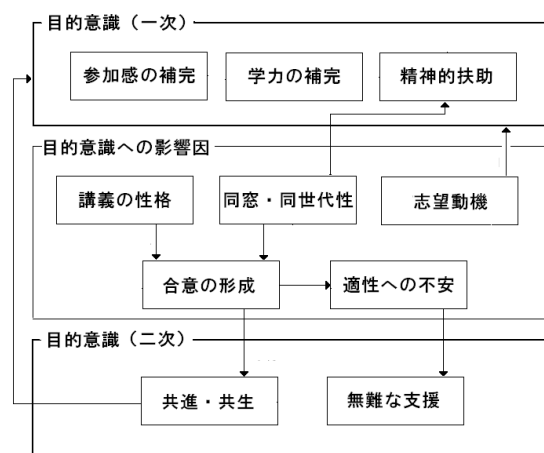


図2 支援学生の目的意識の構造

であるときや、支援者の人数が不足している時は、それを指摘できず自己葛藤に陥っていた。また、ノートテイカーの悪筆や要約ミス、基礎知識の欠落といった力量不足からも自己葛藤に至ることがわかった。自己開示を行い、特に相手との仲が良い場合は、障害に対する理解を獲得していた。しかし、周囲への影響がある場合は、はばかり（遠慮）の心境が起こっていた。そして、場の雰囲気をしらけさせたくない思いや特別視を望まない姿勢が、自己葛藤へと繋がっていた。自己葛藤の後、自発的学習が必要と感じた場合は、問題になお向き合うが、緊張状態が持続していた。また、理解への諦めがあり、周囲とコミュニケーションが取れない時や、障害を自己開示することへの抵抗がある場合は、やり過ごし・聞いているフリといった回避行動を起こしていた。緊張状態を持続させることや、回避行動といった選択は問題の抜本的解決には至らず、新たに困難の状況を見ていた。

2.2 支援を担当する学生の目的意識

2.1 同様に、分析結果を元に作成した概念を図2に示す。支援学生は一次的な目的意識として、支援にあたって聴覚障害学生の学力補完、講義の参加感の補完、及び聴覚障害学生に対する精神的扶助のうち、いずれかを重視していることがわかった。上述の選択に影響を与える要因には、支援に対する志望動機の影響があった。志望動機には、速く書く術を習得したいといった技術志向、アルバイトとしての魅力といった

経済志向、障害を持った人の役に立ちたい気持ちといった貢献志向があり、これらは複合していることがわかった。技術志向や経済志向に重点のある者は学力の補完に最初から目的意識が向くが、貢献志向に重点のある者は、まず精神的扶助へと関心が向きやすいことがわかった。また、目的意識への影響因には、支援に入った講義の性格や、支援をする聴覚障害学生との同窓・同世代という関係性や、合意の形成の有無、自分自身の支援者としての適性不安による影響が抽出された。講義の性格において講義の専門性が強いとき、双方に合意の形成をする必要が生じていた。また、同窓・同世代性による言いづらさが合意の形成の成否に作用していることがわかった。さらに同窓・同世代性の影響によって感情移入が起こり、支援学生の目的意識が精神的扶助へ偏ることがわかった。支援学生と聴覚障害学生双方に合意の形成が十分に見られる時は、支援学生の意識が、聴覚障害学生との共進・共生へと向くが、合意が形成されず不十分である際は、支援学生は自らの適性への不安を感じ、保守化が起こること無難な支援へと向かうことがわかった。共進・共生へと意識の向いた支援学生は一次的目的意識へと回帰し、聴覚障害学生との協議により支援の再検討を行い、当事者のニーズを考慮した姿勢を持つことがわかった。

3. おわりに

上述した二つの調査を踏まえると、高等教育機関における聴覚障害学生の支援には、支援に携わる者同士や、周囲の人間との関係性の問題が多く表出していることがわかった。聴覚障害学生と支援学生はともに、一学生との立場と、支援者・被支援者としての立場を併せ持つがゆえ、その使い分けに苦慮し、周囲との相互作用による影響を受けやすい現状がある。具体的には、公私混同や過干渉、支援の保守化、自己葛藤といった事象に顕れている。支援技術・機器の導入にあたり、テクニカルな側面も大切であるが、上述の背景に留意し、支援の在り方を検討していく必要があると考える。

